

「江戸東京たても園で住宅の歴史や建物の魅力を学ぶ講座」

「3LDK」の4文字から何が想像できるでしょうか。居間、食堂、台所に個室が3部屋ある住宅が想像されると思いますが、このようなイメージはいつ頃から一般化されたのでしょうか？

江戸時代の庶民の住まいは、いわゆる茅葺民家で、田の字に並んだ部屋に土間のある間取りでした。その後、明治維新を経て私たちの住まいは大きく変化し、「nLDK」の間取りは戦後の高度経済成長期に誕生したと言われます。同時に、近世から続いた茅葺民家の片鱗が消えてしまいました。一方、海外に目を向けると住まいの変化は緩やかで、欧米では築100年を超える住宅も普通に街中に存在し、住み継がれています。最近では日本でも持続的な社会を目指す中で、高度経済成長期に削ぎ落としてきた、古き良き住まい方が見直されています。



江戸時代の民家



昭和初期の建築家の自邸

この講座では、江戸東京たても園の各時代を代表する住まいを見学し、耐震や断熱等級等の数量評価では現れてこない、日本の気候風土の中で育まれてきた住まいの魅力を探ります。温故知新から、これからの家づくりのヒントを発見していただくと幸いです。

講座の後（希望者）は明治時代の洋館デ・ラランデ邸で昼食を楽しみます。

開催日時：2026年5月29日（金） 10時30分から12時30分

集合：10時30分 江戸東京たても園 入口集合（小金井市桜町3-7-1都立小金井公園）

※入園料400円及び番外編の昼食代は個人負担

講師：提携建築士 酒井哲

設計業務のかたわら、（公財）たましん地域文化財団発行季刊誌「多摩のあゆみ」にて古き良き建築を紹介する連載を2004年より担当。住宅医協会理事、日野市文化財保護審議会委員

※お申込は（株）生活クラブすまい・る（03-5451-8005）まで